松里論文に関するコメントと質問 （望月哲男）

1 ページ　中段

「日本のような、基本的に国庫によって人文社会科学が賄われている国」→

「日本のように、国家が大学などの施設を通じて人文社会科学を支える体制をとっている国？」

1 ページ　下段

「通常、帝国の崩壊の後には、旧宗主国が旧植民地の研究において重要な役割を果たすものである。たとえば、ヴェトナムの独立後も、フランスがヴェトナム研究において大きなウェイトを占めた時期が長く続いたと聞く。」→

地続きの帝国と植民地帝国の場合、またそれぞれの学術文化を持った国家の寄り合いの場合と学術文化に大差がある国家間の従属支配関係の場合、などで、このような「帝国崩壊」後の相互研究状況は違うのではないでしょうか。ロシア帝国期の周辺地域研究とソ連期のアカデミーや大学による地域研究とは、同質のものでしょうか？そもそもソ連期の各共和国の間での相互研究体制のあり方（たとえばロシアのウクライナ研究vsウクライナのロシア研究）は、ロシアという「宗主国」の意思として説明されるものだけでなく、ソ連という体制を成り立たせていた世界観の産物という側面があるのではと思います。仮にそういう曖昧な議論は別にしても、「帝国」の中で行われていた地域研究が、帝国崩壊後に破綻するのは、日本の大陸研究の例にあるように普通のことにも思えるのですが。

2 ページ　3 段目

「中域圏とは、従来同質的と考えられてきた空間領域の一部が、隣接外部領域との相互作用の中で特殊性を帯びることによって生まれる地域である。研究目的により可変的・選択的な分析概念であり実体概念ではない。たとえば、かつての社会主義圏には、それぞれＥＵ、イスラム圏、東アジア諸国の引力で、東中欧・バルト中域圏、中央ユーラシア中域圏、ロシア極東中域圏が生まれたとみなしうる。」→

よく理解しないまま言うのですが、かつての社会主義圏というもの自体が、それ以前にそれぞれ異質でありながらロシア帝国やソ連、社会主義ブロックという大きな枠組みに統合されてきたという前提としての経緯があって、その限りでまとまりはあっても同質的ではなかったのではないでしょうか。だからこそその枠が崩れたときに、現代世界の政治経済的引力だけではなく、社会主義期やロシア帝国期以前のそれぞれの世界イメージが引力として働いて、現在のような「中域圏」が出てきたのではないでしょうか。